

大友氏のその後

大友宗麟は理想を実現するために日向国（宮崎県）に出陣しました。しかし、高城・耳川の戦いで勢力拡大を図る島津氏に大敗し、これをきっかけに大友氏の領国では武士たちの反乱が相次ぎ、大友氏の勢力は次第に弱まっていきました。



鶴賀城より戸次川古戦場を望む

島津氏との決戦

1586年（天正14）、勢いを増した島津軍が豊後に侵攻してくると、各地で戦いが起こります。戸次にある鶴賀城が島津軍の猛攻に耐えているとき、豊臣秀吉の命を受けた四国の仙石氏や長宗我部氏などの援軍が到着しました。しかし戸次川（大野川）で島津軍の策略にはまり、大友・四国連合軍は敗れました。

大友義統（宗麟の長男）は高崎城、さらに龍王城（宇佐市安心院）へと退きました。大友軍の主力がいなくなった府内の町には島津軍が侵攻し、その混乱の中、町のほとんどは焼失してしまいました。

宗麟の最期

宗麟はこの時、移り住んでいた臼杵の丹生島城に籠城し、「国崩し」の大砲などを用いて島津軍を迎え撃ちました。やがて秀吉の本隊が九州に到着し、島津軍は豊後から退いていきます。九州を平定した秀吉は、大友義統に豊後一国を安堵し、宗麟には日向国を与えようとしたが、宗麟はこれを辞退しました。

その後、宗麟は隠居地としていた津久見で、1587年（天正15）に57年の生涯を終えました。



大友宗麟画像（模写）
原本：大徳寺瑞峯院蔵

その後の大友氏

大友軍は、朝鮮侵略に参加しますが、味方が敗れたという情報を聞き、戦場からいち早く撤退しました。義統はこの時の罪を問われ、1593年（文禄2）秀吉から大名の地位と領地を取り上げられます。ここに、400年にわたる大友氏の豊後支配が終わります。

秀吉の死後、義統はお家再興をめざして関ヶ原の合戦で、西軍（石田三成側）に味方し、石垣原（別府市）において東軍の黒田官兵衛（孝高）と戦いますが敗北し、大友氏の豊後回復はなりませんでした。

義統の子である義乗は徳川家康に預けられ、その後徳川家の家臣として活躍しました。これにより大友氏は、幕府の儀礼や儀式、朝廷との連絡を行う「高家」として仕えていくことになりました。



「太平記拾遺」大友侍従義統
大分市歴史資料館蔵